

京都大学	博士(文学)	氏名	二 宮 美那子
論文題目	中国唐代「園林」文学研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は、中国唐代における「園林文学」を研究対象とする。「園林」は日本語の「庭園」に近い概念であり、一般に、「庭園と、それを含む私的居住空間全体」を指す。具体的には、都市内部に設けられた官僚の別宅、郊外に造られた荘園を含む別荘、皇帝の御苑や離宮など、その内実は実に幅広く、役割や規模も様々である。唐代には、園林は余暇を過ごす場、私的生活の場として盛んに造営され、これを背景として様々な文学活動に深く関わることとなった。</p> <p>本研究は、この「園林」と文学の関わりを模索しつつ、「園林の文学」はどのような姿形で表され、どのような成就を見せるのか、また中国文学全体においてどのように位置付けされるのかを探るものである。全体は、文学に表れる園林の性質に応じて以下の二つに分けられる。第一は、「官」に対抗する私生活の充実の場、士大夫の理想・願望（隠逸・閑適）を反映する場としての園林。第二は、余暇を過ごす社交（遊戯）の場としての園林である。これに基づき、具体的には以下の問題を論じた。</p> <p>第一部「理想郷としての園林」では、私的生活を送る場としての、園林の姿全体を見通せるような作品を取り上げる。</p> <p>第一章「李徳裕と平泉荘」では、中晩唐の著名な政治家、李徳裕（787-849）が所有していた園林「平泉荘」をめぐる作品を分析する。唐代士大夫にとっての園林は、余暇を過ごす場所、或いは収入源となる荘園を兼ねた「帰隠」（具体的には官界を引退することを指す）の場所など、多様な側面を持っていた。平泉荘は当時、権力者の園林として非常に有名であり、周辺の記録はその豪華な姿を伝える。一方で、所有者である李徳裕自身が大量に残した平泉荘を題材とした詩文には、物質的豊かさだけでなく穏やかな自然の姿も多く描かれ、彼がそこに込めた理想や憧憬を読み取ることができる。本論では、「故郷」としての平泉・平泉の叙景・多くの蒐集品にあふれた博物館としての平泉という三つの側面から分析を試み、また最終章では、李徳裕が平泉に託した隠逸願望のありようを分析した。</p> <p>第二章「池上篇并序」論」では、中唐を代表する詩人白居易（772-843）の晩年の住まいである、洛陽履道里の邸宅を題材とした「池上篇并序」を取り上げた。白居易は住居に多大なるこだわりを持つ詩人であり、転居の度に多くの作品を残している。「住居詩」というジャンルは彼の文学の中で重要な位置を占めている。中でも洛陽履道里の邸宅は、晩年の最も長い期間を過ごした場所でもあり、白居易がそれまで築き</p>			

上げてきた美意識を集大成させて作った、理想の住まいと言っても良い。

本論ではまず、「池上篇并序」の独自性を確認する。「池上篇并序」は長い序文と四言詩という形式を持ち、その内容や簡潔な表現と併せると過去に類似の作品を見ない。また白居易は水辺に強いこだわりをもっており、題名に用いられた「池上」という言葉は、白居易にとって自適の空間全体を象徴する特別な意味を持つものであった。

続いて本文に即して作品の解釈を提示しつつ、その中から「目の前に全てある」と言う表現、「有」字を用いた表現という、二つの修辞に注目する。これらは白居易文学全体に繰り返し表れるもので、「今おかれた状況の中で幸せと満足を見出す」とされる白居易文学の、根幹を支える重要な修辞である。本章では、白居易のその他の作品からこの修辞の用例を抽出・検討し、これらが「池上篇并序」で自適の空間を詠出するために効果的に用いられていることを指摘した。結論部分では以上のようなことをふまえ、「池上篇并序」は「獲得した自適の地を文学における表現世界として昇華したものであり、また同時に自己の処世のあり方の、力強い宣言文ともなっている」とした。

第二部「園林の美学」では、主に園林の叙景に注目する。自然の景観に恵まれた園林は、人々が余暇を過ごす場所、集い交流する場所である。園林で作られた応酬詩は、多く遊戯的・社交的な性格を持ち、そこには人工を経た園林ならではの景観美が描かれる。

第二部第一章では、中唐の著名な政治家裴度(764-839)の擁する園林を描いた白居易の長編詩、「裴侍中晋公以集賢林亭即事詩二十六韻見贈猥蒙微和才拙詞繁輒廣爲五百言以伸酬獻(裴侍中晋公 集賢林亭即事詩二十六韻を以て贈られ猥りに和を徴さる才拙にして詞繁く 輒ち広げて五百言を為り以て酬獻を伸ぶ)」を取り上げた。本論ではまず、白居易がこの詩を献上した相手である裴度との交流の経緯と、その様相を検討する。裴度と白居易、また白居易晩年の詩友である劉禹錫は、長安での交流を経て、官界を半ば引退した形で赴いた「東都」洛陽において、盛んに詩を応酬した。当時の洛陽は、中央政界の混乱から距離を置くことが出来る別天地であった。裴度はそこで功成り名遂げて余生を楽しむ主人役として君臨し、白居易や劉禹錫はその「お抱え詩人」として裴度のために詩を詠んだ。三人の交流の舞台となったのが、裴度が洛陽に造営した美しい園林であった。

続いて「裴侍中晋公以集賢林亭即事詩二十六韻見贈……」詩を分析する。作品は園林の素晴らしさを称え、裴度のこれまでの功績や、官界を順調に半引退し得た事を賛美するものだが、これは中国文学の伝統的なジャンルである公宴詩を、踏襲・拡大したものと言える。作品には、人工と自然が入り交じった園林の景観を描くための工夫が随所にこらされ、独特の叙景表現が用いられている。また作品は、従来園林を描く際に良く用いられていた方法、すなわち「隠逸」や「仙界」などの型にはまった理想世界を園林に投影するのではなく、園林の造作そのものを書いてそれを賛美する点に

新しさがあり、当時の園林芸術のありようを示すものとしても重要である。

第二部第二章「唐代園林組詩論」では、「園林或いは景勝地など一定の区切りがある場所を題材とし」、「そのなかで景物＝詩題を設定する」唐代の連作を、考察の対象とする。このような形式の作品は、園林を鑑賞し遊ぶものとして、唐代において一定の広がりを見せていた。当時の園林は一般にいくつかの鑑賞のポイントを設定しつつ設計されるものであり、ここで取り上げる作品も、このような園林の設計と深い繋がりを持つ。本論は、この形式の代表作であり実質上の嚆矢となる王維「輞川集」から晩唐に至るまでの流れを追い、その表現上の特徴や作品の生まれる背景を考察する。

王維「輞川集」は園林の風景を点景の連なりで描く連作で、この独特の形式に高い芸術性を付与した。その影響を受けたと考えられる中唐前期の錢起・顧況らの「雜詠」「雜題」作品は、同じく五言絶句、また二十首前後の連作で景勝地を描く。うち、錢起の「藍田溪雜詠二十二首」は、動物・植物、鐘やせせらぎの響きをも題材として取り入れ、景勝地を舞台に「様々なものを取りまぜて描く」雜詠・雜題を、豊かに展開したものであった。限られた場所から題材をとる「雜詠」「雜題」の連作は、これ以降も引き続き作られる。唐代に先立つ「雜詠」が詠物詩の連作であるように、「雜詠」はもともと詠物詩的な作品となじみやすい形式であった。唐代にはそれが、園林・景勝地などの一定の区切られた場所を舞台とした作品として発展したのである。

また、中唐後期になると、「雜詠・雜題」を詩題に冠さないものの、類似した形式の短詩連作が一定の流行を見た。作品は、庭園の現在の主人が選んだ庭園内の景勝地(＝詩題)とその内容に従って、すなわち与えられた詩題によって制作する、一種の題詠作品であった。これらの作品は、大勢が一つの場、一つの題材を共有して楽しむという、交友関係を基礎とした社交上の意味をもっていた。唱和する詩人たちの多くは、詩作の対象となった庭園を見ておらず、原唱や詩題に基づいて唱和詩を作ったと考えられる。作品は、園林を舞台とする社交の場を、空間・時間の隔たりをこえて共有するものであった。これらの性質ゆえに、その内容は多く遊戯的なものとなる。

これらの作品いずれもの源流に、王維「輞川集」がある。「輞川集」は言うなれば、詩によって園林を表現・鑑賞する型を定めたのである。一方で、文学的交流における集団と個という点に注目してみると、裴迪と二人だけの、閉ざされた唱和形式で作られた「輞川集」は、むしろ特殊なものであることに気付く。後世の詩人たちは、王維「輞川集」が示した園林を詠う表現形式を踏襲しつつも、一方で中国文学における自然な流れとして、それを集団で楽しむもの、社交の道具として用いたのであった。

付論は、中晩唐の詩人姚合(777-842)の代表作「武功縣中作三十首」を取り上げ、作品の背後に広がっていた「小吏文学」の存在を指摘するもの。作品は官と隠との拮抗の中で「役人としての隠逸的世界」(吏隱)を描くものであり、士大夫の自己実現空間を描く点において、「園林文学」に連なるものである。

本論は「武功縣中作」の作品分析や、同じく姚合の連作「閑居遣懷十首」との比較を通し、当時の士大夫の意識を探るために重要な概念である「吏隱」が、姚合によってどのように描かれているかを考察する。また併せて、作品の背後に下級官僚特有の叙情の広がりが存在したことを指摘し、「小吏文学」という枠組みを新たに提示した。

一、「武功県という空間」では、中央との対比や不遇感を繰り返す「武功縣中作」の背景に、自身と都との距離や官界での位置に鋭敏に反応する、士大夫独特の叙情が存在することを指摘する。二、「官と隱」第一節では、作品中の「厭うべき官」の描かれ方に注目する。詩語としてはなじみの薄い、役所で用いられる言葉を敢えて用いる工夫や、「官を厭う」強烈な比喻によって、「武功縣中作」は地方の役人としての暮らしぶりを活写する。第二節では、「武功縣中作」と「閑居遣懷」に共通して登場する「青山」（帰隱の象徴）を繞る表現に注目し、姚合が現実の官僚生活を巧みに映しつつ作品を創作していることを指摘する。三、「小吏文学」の広がりでは、盛唐・中唐の詩人たちが県吏時代に書いた作品にも、以上に指摘した姚合作品と共通する要素が見られることを指摘する。この要素を大きく広げ、また集中して描いたのが、姚合の「武功縣中作」であると結論づけた。

(論文審査の結果の要旨)

近年、中国では「園林」文化の研究が活発になっている。「園林」とは居宅・別荘・荘園のなかの庭園を指し、いわば人為的に取り込まれた、所有された自然である。本論は文化のなかに園林を位置づける中国の研究を吸収しながら、園林を描いた唐代の文学に限定して考察したものである。これは少なくとも日本ではまだ着手されていない領域といてよい。論者がそこに関心を向けるのは、園林に関わる作品群が文学の一つのジャンルを形成し、園林に対する美意識のみならず、中国士大夫の仕隠との関わりが端的にあらわれているからである。

第一部では中唐の代表的な政治家李徳裕と、同じく中唐の代表的な文人白居易、両者の園林との関わりを通して、その時代の園林文学の対比的な特徴を浮き彫りにする。李徳裕は洛陽郊外の平泉に荘園・別荘を保有し、そこに中国各地の珍しい植物や岩石を集めた。当時の朝廷で長期間続いた「牛李の党争」と呼ばれる権力闘争、李徳裕はその一方の旗頭であった。その渦中であって浮沈を繰り返し、朝廷と左遷された地方との間で往復を繰り返した彼は、平泉に居住する余裕がなかったのみならず、足を運ぶことすら希であった。それゆえ平泉は彼にとって隠棲へのあこがれに終始するものであった。官界を離れ、いつの日かそこで暮らすことを夢見続けたのである。平泉をうたう詩篇は、ほとんどが遠くにあつて思うもの、いわば観念としての理想郷にほかならなかった。一方、白居易にとって洛陽履道里の園林は、長い晩年のまったき隠逸を実現しえた場であった。そこでの代表作「池上篇」には喜びに浸る、満ち足りた思いが存分に描出されている。このように対蹠的な両者の園林に対する態度を、論者はそれぞれの表現に即して解明している。たとえば「知止足」、与えられた条件に止まり、自足することを意味する『老子』に由来する言葉を、両者はともに用いているが、李徳裕の場合、政治の場において欲望を抑制し、しかるべき時に身を引いて安泰を得るという意味に限られる。一方、白居易においては隠逸の場を与えられ、それに自足している喜びをあらわす語として用いる。また李徳裕にとって平泉荘は遠くからあこがれとともに思い起こす場であったことは「憶……(……を憶う)」を詩題とする連作に明らかであるが、白居易の方は詩中に「有……(……有り)」を繰り返し、自分に喜びを与える物に囲まれている満足感に浸る。このように作品の表現そのものに即することによって、両者の対比が鮮やかに示される。何が書かれているかのみならず、いかに書かれているかを通して論を立てる論者の方法は高く評価したい。また李徳裕が平泉荘に収集した植物や岩石の命名の方法から、彼が伝統的な観念の枠組みのなかにあつたこと、白居易は自分自身の好みを基準として自分が気に入った南方の物を持ち来たことに両者の価値観の違いを指摘する。さらに李徳裕は常に政治の世界と対峙しながら平泉荘の理想郷を思い描くのに対して、白居易の園林には対峙される世界がないままにそれ自体で存在しているなど、両者の差異を明晰に示す指摘も重要である。

第一部では以上のように李徳裕・白居易という二人の園林との関わりを別個に論じ

て対比するが、第二部で取り上げる、やはり政界の重鎮であった裴度はその晩年、白居易と浅からぬ交わりがあった。裴度の洛陽の園林に白居易や劉禹錫はしばしば招かれ、詩を呈しているのである。白居易が描くそこには園林を理想世界として捉えるという態度が後退し、造園の具体的な造作に関心を抱く、園林に対する新たな態度が見られることを論者は指摘する。また詩作の状況からわかるように、園林文学には社交としての要素も無視できないことも併せて論じる。

第二部第二章では、園林のいくつかのスポットを取り上げてそれぞれに短い詩を記す連作詩の系譜を論じる。その嚆矢として王維「輞川集」が挙げられる。「輞川集」は王維の別墅輞川荘のなかの二十のスポットを選んで五言絶句を裴迪とともに詠じた連作である。それぞれが一つの独立した空間でありつつ、また全体として一つの大きな空間を創り出すこの連作詩は、それに併せて「輞川図」が描かれたように、絵画にも類する性格を持つ。そこに園林に対する美意識、園林を表現する一つの様式が成立し、以後も園林の連作詩が継承されていく。しかし論者が詳しく分析をする韓愈の連作詩が示しているように、のちの連作詩には景物そのものの賞翫よりも、機知を交えた遊びといった性格が色濃くなる。王維が外部と断絶した一つの美的世界を構築したのと異なり、社交の場での遊戯的なものにすり替わっているのである。同じ題材、表現様式を踏襲しながら、内実が変化していく過程を論者は追跡する。そこで明らかになるのは、祖述したはずの王維の存在がむしろ遠ざかり、「輞川集」は唐代文学のなかで特異なものだったのではないかという新たな認識である。論者にとっては予想外の結果であったかも知れないが、この指摘も重要な意味を持つだろう。変容を跡づけたうえでの王維「輞川集」の捉え直しも今後期待したい。

論者の行文にはやや稚拙なところがあり、より適切な表現を与えればより説得力を増すと思われる箇所も混じるが、唐代、ことに中唐を中心とした園林文学について幾多の知見を提示した好論であることは間違いない。今後は宋代に入ってそれがどのように展開していくか、さらなる考究を期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の論文として価値あるものと認められる。なお、2011年2月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。